

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



速水御舟

(二八九四—一九三五／明治二十—昭和十)

《芍薬図》

一九三三（大正十二）年

紙本着色

五五・一×四四・五cm

伊藤恒道氏寄贈

雨に打たれて頭を垂れる大輪の芍薬。かすかな雨脚の描写を透かして、鮮やかな赤が目を引き。花弁の縁にはひとひらずつ薄く胡粉が塗られ、花びらが幾重にも重なった豪奢で重たげな様子や、濡れて一層艶を増す質感が繊細に表される。左側の胡粉の白をやや目立たせることで、葉陰となる右側との微妙な明るさの違いも感じさせている。その葉陰には雨宿りする雀が二羽。一羽は芍薬を眺め、一羽は花など知らぬ気に雨を避けて目をつぶる。

速水御舟は、大正半ば頃から徹底した細密描写によって写実を突きつめていった。本作は、その探求を経てさらに先へと進んでいくこうとする時期の作。雨のなかの芍薬と雀をめぐり、抒情が精緻な描写をもとに優しく表現された佳品である。

（学芸課長 石上充代）

No.  
155  
2024年度 | 秋 |

# チャカホイ節が聴こえてくる

館長 木下直之

チャカホイ節Ⅱ東京美術学校およびその後身である東京藝術大学美術学部で連綿と歌い継がれてきた学生歌。「正調チャカホイ節」というものがあるの  
か知らない。時代とともに歌詞は変わ  
り、それは無数にあるだろう。いずれ  
にせよ、宴席での歌ゆえほとんど猥歌  
と化してゆく。するとその先に「ヨカ  
チン音頭」なるものが出現する。輪を  
かけて卑猥。呆れるほどホモソーシャ  
ルな世界。

中村萬平Ⅱ浜松出身、和菓子屋の息子、  
油画科を昭和一六年に卒業し、翌年応  
召、そのまま帰らぬ人となった。下級  
生の野見山曉治の目には「スーパース  
ター」に映った。誰もが「萬平」と呼  
んで慕った。そんな萬平に誘われて、  
野見山が上野の焼鳥屋で飲んでいる  
と、酔いが回ってチャカホイ節が始ま  
った。「チャカホイ唄えばポリスが怒  
る、怒るポリスの子が唄う、チャカホ  
イ」という具合に、この歌は延々と続  
いて終わらない。それを奥座敷にいた

陸軍将校が怒鳴りつける。「お前らと  
同じ若者が大陸で命を落としているの  
に、それでもお前ら、日本国民か」。  
すると、カウンターで飲んでいた林芙  
美子が「なにが悪いんだよ」と軍人を  
一喝した（野見山曉治『とこしえのお  
嬢さん―記憶のなかの人』）。

「軍人だけが国を守ってるんじゃない  
よ」、「卒業すりゃ兵隊だろ、戦地に  
征くんだろ、堂々と飲みなさいよ」と  
いつて林芙美子が未来の兵隊の味方を  
するのは、文学者として従軍した経験  
があったからだ。従軍記『北岸部隊』中  
央公論社、昭和一四年）には、「前線  
に出てみて、私は戦争の崇高な美しさ  
にうたれた」という一節があり、「私は  
兵隊が好きだ」という詩を載せてい  
る。中公文庫で読める。

学徒出陣Ⅱ萬平が正規に卒業できた最  
後の学年、野見山は昭和一八年九月に  
繰り上げ卒業、戦局が悪化し兵隊が足  
りなくなり、その確保のために政府は  
修業年限をどんどん短縮した。とうと

う同年一〇月に徴集延期そのものが停  
止され、一二月に一斉に入隊、いわゆ  
る「学徒出陣」となった。伊豆河津町  
出身の佐藤孝は春に入学し、冬には学  
校を出されたのだから、わずか半年余  
りの学生生活だった。残された日々  
に上野の博物館を訪れ、古画の前に立っ  
た。その時の日記が『きけわだつみの  
こえ』（岩波文庫）で読める。

上野駅Ⅱ駅とは見送り見送られる場所  
である。そこで日常生活、軍隊用語で  
いう「地方」、「娑婆」が終わる。佐藤  
の同級生草野睿三は生還したため、戦  
後になってこんな思い出を語ることが  
できた。「動員と決まるや、各科で壮  
行会をやり、我々は毎晩騒いだ。暴れ  
たい連中は裸になって、筵の幟を立て、  
石油缶を叩きながら上野駅構内の広場  
へ行って騒いだ。ヨカチンも踊った」  
（『東京芸術大学百年史 東京美術学校  
篇』第三巻）。

野見山は入隊のために故郷弘前へ向  
かう佐々木四郎を上野駅に見送った。

佐々木はチャカホイを踊りながら、「階  
段を一段ずつ上ってゆき、手前の低い  
天井に遮られて、上半身から少しづつ  
見えなくなり、ついに踊っている裸足  
の足先が白く残像のように浮いて、私  
たちの視野から消えていった」（野見  
山曉治『遺された画集』）。

いま同じ場所に立つと、改札の上に、  
猪熊弦一郎が昭和二六年に描いた大壁  
画が見える。駅から戦地へ、ではなく、  
どこにでも行ける時代になったことを  
示して、『自由』と名づけられた。

配属将校殴打事件Ⅱ戦争が近づき、美  
術学校でも軍事教練が組み込まれた。  
画学生と配属将校とは水と油だった。  
絵筆と銃は相容れない。さらにいえば、  
画学生の長髪と軍帽も相容れない。長  
い髪を無理やり帽子に押し込んで、軍  
事教練に臨んだひとりの画学生がい  
た。見つけた将校がいきなり殴ると、  
彼も銃を放り出して殴り返した。それ  
は信じられない光景だったと、やはり  
野見山が伝えてくれる（前掲書）。  
無言館Ⅱ一九九七年長野県上田市に開  
館、遺族のもとに遺された絵を集めて、  
「戦没画学生慰霊美術館」と名乗る。  
その館名は絶妙、絵は何も語らない、  
その前に立つ人もまた言葉を失う。し  
かし、耳を澄ませば、チャカホイ節が  
聴こえてくる。

# ロダン館でのかけがえのない「いま、ここ」

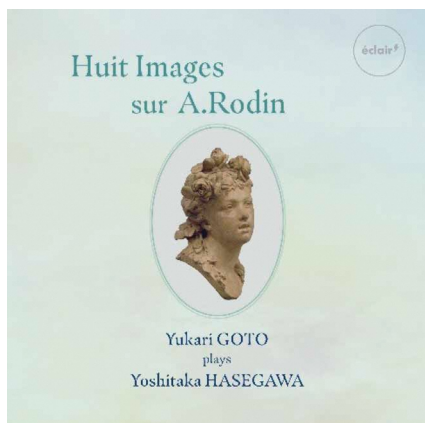
ピアニスト・静岡大学教育学部准教授 後藤 友香理

今から十年前の二〇一四年春、私は静岡大学へ着任し、東京から越してきました。ちょうどその頃、静岡大学は文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、その一環として「ロダンの彫刻作品にインスパイアされた音楽作品を作曲し、それをロダン館で初演する」というコンセプトのコンサートを企画していました。着任したばかりの私もそこに加わらせていただき、他に類を見ないユニークな経験をしました。助成期間終了後も形を変えながら今日までコンサートを続けさせていただき、ロダン館での十年はそのまま私の静岡での十年となりました。

私がロダン館でのコンサートにこれだけ情熱と思い入れを持ち続けてこれたのはなぜでしょう。それはこのコンサートで初演してきた楽曲が、「いま、ここ」で生まれた楽曲だったから。普段は美術館であるロダン

館が今日だけはコンサート会場でもあるという特別な「いま、ここ」を共有できる時空だったから。そして回を重ねるうちに「いま、ここ」に集うことを楽しみにしてくださるお客様がいらしたから。私が演奏するのは、「いま」まさに「ここ」で生きていることを確認・表現するためであり、それを触発してくれるのがロダンの作品とロダン館だったのだと感じます。

クラシック音楽は言うまでもなくヨーロッパで生まれた芸術であり、とりわけ起源や由来を重視するジャンルです。日本人の音楽家がこれだけ世界で活躍する現代においても、「本場」はあくまでヨー



これまでロダン館で演奏した、作曲家・長谷川慶岳氏の楽曲を収めたCDを2022年、発表しました。収録はロダン館で行われ、この会場の音響の良さも体感できます。ネットショップのほか、ミュージアムショップでもお求めいただけます。



後藤友香理（ごとう・ゆかり）  
ピアニスト、静岡大学教育学部准教授。演奏と論文により博士号取得（音楽・東京藝術大学）。2014年以降、ロダンウィーク内のコンサートに出演。本年も11月4日にコンサート「身体、躍動、リズム！」が開催される。  
後藤友香理ウェブサイト  
<https://www.yukarigoto.com/>

ロッパだという考えがあります。西洋美術においても同じようなところはあるかもしれません。西洋美術はやはり西洋のものなのか、あるいは私たちがいまロダンの作品を鑑賞することにどのような意味があるのか。静岡にこれだけコレクションの充実したロダン館があるのも考えてみれば不思議なことでは。

でもアートには、「西洋vs.日本」あるいは「過去と現在」のように自らと他者を対比させるのではなく、むしろ共存させ、結び合わせ、越境

させる力があるのではないのでしょうか。「静岡」にある「ロダン館」で、「美術」に着想を得た「音楽」を、「日本人」である私が「ピアノ」で演奏する。あらゆる対比が「いま、ここ」で交差し繋がることで新たな表現が生まれる可能性がある。そんな貴重な挑戦を続けさせていただきました。ロダン館での演奏活動は、長年感じてきた「日本人である私がクラシック音楽をやる意味は何か」という疑問に一つの答えを見せてくれた気がしています。

多くの方々のお力添えによってこの十年間、ロダン館でかけがえのない時間を持つことができました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

## 企画展

# 無言館と、 かつてありし信濃デッサン館展 — 窪島誠一郎の眼

2024年10月12日(土)～12月15日(日)

無言館、傷ついた画布のドーム、  
オリヅの読書館、時の庫…。

無言館の施設には詩的な響きを持つ名前がつけられています。その場所につけられたイマジネーションを刺激する言葉の数々は、訪れる人たちが現実の生活から離れ、作品の世界に没入し、作品を遺した作家について思いを馳せることへと誘ってくれるように思います。

一九九七年に開館した戦没画学生慰霊美術館 無言館は、太平洋戦争で亡くなった画学生の絵を収蔵する館として、いまや多くの人たちに知られています。その収蔵する作品がきわめてユニークであることは言うまでもありませんが、あらためて特徴としてあげたいのは、この美術館が「窪島誠一郎」という一人の人間がつくった美術館であることです。

無言館は、公的な助成金、公的な応援は一切受けずにこれまで運営されてきました。それは国の命令によって戦地にたつた彼らの絵は、民間の力で支えてこそ意味があるという窪島氏の考えによることです。

また、無言館には何一つとして窪島氏の眼を通していないものはありません。先に紹介した印象的な施設の名称。教会堂のような重厚な空気を漂わせる館の設計。どの作品を展示するのか。どこにどのような文章からそのレイアウトまで、ありとあらゆることに目配りがなされています。そもそもそこに掛けられる作品自体も窪島氏が遺族を訪ねて集めてきたものです。敷地内の隅から隅まで窪島氏の思いや意地や理想や美意識がそこには息づいています。

無言館は今年、歴史的な岐路に立ちました。これまで窪島氏が奮闘して支えてきた館ですが、共同館主の内田也哉子氏をむかえ、学校法人立命館と連携を強化することが発表されました。これは82歳を迎えた窪島氏が、自分の死後をみすえ、無言館をどうしていくか考えてのことになります。窪島氏が守ってきた無言館は、今後少しずつ変わっていくことになるでしょう。

今回の展覧会は、無言館に収蔵された戦没画学生の作品を紹介することが眼目にありますが、それだけではありません。なぜ無言館がつくられたのか。その前史にはなにがあるのか。歴史的岐路にたつた無言館のこれまでの軌跡をとらえ、その歩みを記録し、みなさんと共有したいと思います。一人の人間がつくった美術館がなしてきたことやその背景を知ることは、わたしたちの公立美術館だからできることや公立美術館が守ることを考える機会にもなるのではないのでしょうか。そのようにも期待しています。

また、今回の展覧会を一つの扉として、信州上田市にある無言館にも

是非一度訪れてみて欲しいと思います。無言館の前に窪島氏が設立した信濃デッサン館は閉館し、そのコレクションの大部分は長野県立美術館に譲られました。けれども信濃デッサン館の建物を残照館と改称し、手元に残ったコレクションを展示しています。開館時には、しばしば窪島氏自らが受付に座っています。無言館お訪ねの際は、残照館にも立ち寄り、二つの美術館を守り育てた稀有なる人窪島さんの姿も一目見てきてください。

(上席学芸員 喜多孝臣)



無言館展示風景

ロダン館30周年記念収蔵品展

《地獄の門》ができるまで：  
素描、試作から完成へ

2024年10月9日(水)～12月15日(日)

一九九四（平成六）年、静岡県立美術館は、ユニークな建築空間に三点の彫刻作品を主題別に展示する構成によって、彫刻家オーギュスト・ロダン（一八四〇～一九一七年）の作品と生涯を総体的に辿ることができ、ロダン館をオープンしました。国内では稀少な彫刻常設ギャラリーです。以来、同年の「パリ・ロダン美術館所蔵 ロダン大理石彫刻展」を皮切りに、二〇〇一年の「ロダン

と日本」展など、ロダンに関するテーマ展をこれまで四回実施し、ロダン作品のさらなる普及と紹介に努めてきました。ロダン没後百年にあたる二〇一七（平成二九）年には、彫刻家ロダンと写真の關係に着目した三つの小テーマ展示を連続して実施しました。

ロダン館開館三〇周年を迎えた今年、代表作《地獄の門》に着目したロダン関連小企画となる第四弾を開催します。《地獄の門》は、ロダンが四〇歳のときに、建設予定の装飾美術館の門扉<sup>もんび</sup>として、フランス政府から依頼された作品です。以来、断続的な中断を含みながら、ダンテ・アリギエーリ（一二六五～一三二一年）の長編叙事詩『神曲』『地獄篇』を主題にした巨大彫刻の制作は三〇年以上に及びました。しかし、結局注文主に納められず、ブロンズに铸



オーギュスト・ロダン  
《接吻》東京富士美術館  
©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom



オーギュスト・ロダン  
《ダンテとヴェルギリウス》  
国立西洋美術館 松方コレクション  
Photo: NMWA/DNPartcom 撮影: ©上野則宏



オーギュスト・ロダン  
《地獄の門》静岡県立美術館

造されたのは作者の没後です。このように、独創的な構想と実験が繰り返された長い制作期間、スケールの大きさ、数多くの逸話を残す点で、《地獄の門》は、彫刻家ロダンの人生と芸術活動を象徴する作品と言えます。制作過程にはいまだ謎の部分も残りますが、素描、複数の試作（マケット）、そして門から独立した数多くの彫刻など、多岐にわたる関連作が生まれており、作者のアイデアや制作の変化の過程を見て取ることができます。

本展示では、素描、試作（マケット）から完成まで、《地獄の門》の変化のプロセスを、他館の貴重な所蔵品を含む、ロダン館コレクション以外の《地獄の門》関連彫刻や素描によってご覧いただきます。このようなプロセスの紹介は、彫刻制作の複雑な行程をたどることにもなり

ます。また、当館コレクションから、ロダンが活躍した当時のパリ芸術界の一側面をうかがい知ることができ、ロダンと交流した同時代の作家による絵画・版画も出品予定です。

静岡県立美術館のロダン館は、中央にブロンズの《地獄の門》とその《第三試作》、そして《地獄の門》から独立した関連作を展示しています。この配置は、これまで述べてきたようなロダンの人生とキャリアの縮図と言えるかもしれません。本展は、ロダン館に通じる本館展示室を会場として用います。まずは本展を鑑賞後、ロダン館の《地獄の門》を新たな視点でご覧くださいと思います。

（上席学芸員 南 美幸）

\*会期中、一部展示替えがあります。

\*《地獄の門》はロダン館で鑑賞ください。

# カナレットとピラネージの作画態度について

上席学芸員 新田建史

今年度当館で開催した企画展「カナレットとヴェネツィアの輝き」展<sup>1</sup>は、同時期に「ピラネージとローマの景観」展<sup>2</sup>を収蔵品展として開催することで、幾多のヴェドゥータ（景観画）を同時代に描いた二人の作品を見る、貴重な機会となった。本稿では、彼らの作品をまとめて見ることによって気付いた点を、改めてここで述べておきたい。

まず、カナレット（本名ジョヴァンニ・アントニオ・カナル Canaletto / Giovanni Antonio Canal）は一六九七年にヴェネツィアに生まれ、劇場の舞台美術画家であった父ベルナルドの許で修業を積む。ヴェドゥーティストとして二〇代の半ば頃には頭角を現し、特にイギリスからグランド・ツアーの一環としてヴェネツィアを訪れる貴族の子弟に、熱烈に愛好されるようになる。一七四六年にはイギリスに渡り、ヴェネツィアで得た知遇を生かして制作を続け、一七五五年にはヴェネツィアに帰国、一七六八年に生まれ故郷で没している。

ピラネージ（Giovanni Battista Piranesi）がヴェネツィア領モリヤノ・ダ・メストレで生まれたのは一七二〇年、この年はカナレットの名が初めてヴェネツィアの画家組合（旧制画家信心組合）に登場した年でもある。ヴェネツィアの景観を描き続けたカナレットとは異なり、ピラネージは二〇歳の頃にローマへと赴き、何度かの試みの末、ローマに定住することに成功する。以後、彼は同時代そして古代のローマの偉容を激烈な調子で描き出し、一七七八年にローマで没している。平面作品は基本的に版画を制作しており、油彩画を中心としたカ

ナレットとは対照的である。<sup>4</sup>

同じヴェネツィア出身とはいえ、今日まで続く晴朗なヴェネツィアのイメージを作り上げた画家と、「偉大なローマ」を印象付けた版画家と、生涯を懸けて取り組んだモチーフは全く異なっているのだが、しかし版画を制作している点では共通している。ここでは主に版画作品を比較してみることしよう。

カナレット、ピラネージが制作した版画は、エッチングという銅版画の一種である。彫版の際、ニードルという先の尖った針状の道具を用いるので、ペン画のような線の細太はつけにくい。銅の板を腐食液によって製版する段階で、色々な効果を追加することが出来る。この技法で陰影を付けるには、黒くしたい部分に何本も線を引き、線の密度を上げていくのだが、この時に平行線を使うのがパラレル・ハッチング、交

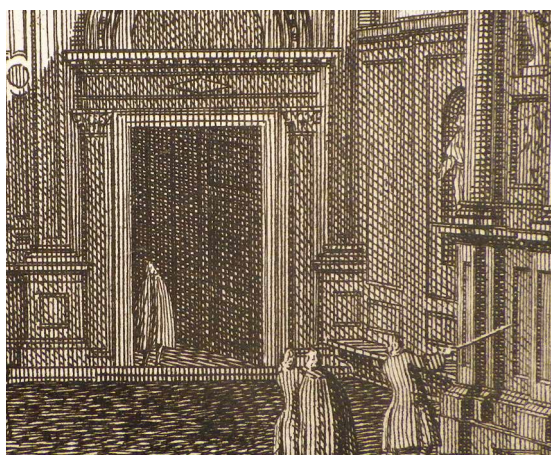


図1 カナレット原画、アントニオ・ヴィゼンティーニ版《サン・ロッコ広場》（部分）



図2 カナレット《ドーロ風景》（部分）

差する線を用いるのがクロス・ハッチングである。

カナレットとピラネージを比較するに当たって、当時の標準的な職人技術の例として、ヴィゼンティーニ（Antonio Vignola）の作品を挙げておこう（図1）。これはカナレットの描いた原画をヴィゼンティーニがエッチングで彫版した作品の部分図である。基本的に、二種類のハッチングを整然と使い分けており、退屈と云えば退屈ではあるが、原画のイメージを癖なく再現することを目指している。

次に、カナレットが原画だけではなく、自ら彫版した作品（図2）では、印象が随分と異なることをご覧頂きたい。建物部分にパラレル・ハッチングを主に使っているが、機械的な印象を与えるヴィゼンティーニの線に比べ、全体としてニュアンスに富んでいる。油彩画家であるカナレットに職



図3 ジョヴァンニ・パッティスタ・ピラネージ《マルケルス劇場》(部分)

人的な平行線を引くのは難しかったという事情はあったにせよ、この場合、それが却って生かされている。

これに比べてピラネージの作品(図3)<sup>7</sup>では、ヴィゼンティーニに勝るとも劣らない、安定したパラル・ハッチングが使われている。注目すべきは、製版の段階でそれらの平行線に加えられた工夫により、単調さを免れている点である。例えば、建物の底の下部、陰になる部分の描線を太くすることで、クロス・ハッチングを減らしながら、より細かな描写を可能にしている。

このように比較してみるとカナレットが、画家としての画風に職人的な技法を取り込みながらも、それに縛られないタッチを軽やかに駆使しているのに対し、ピラネージの方は、職人的な線を丹念に使いこなすことで、その限界を押し抜けて、より細かいニュアンスを得ていると言えそうである。

る。

両者の違いは、構図にも表れている。

ピラネージの場合、大部分の景観画で視点を低く下げ、画面の周囲をモチーフで縁取った上で、前景にあるモチーフの量塊感を強調しながら、奥行へと視点を送ってゆく。重厚な建築物によって示される空間を、奥へと向かって掘り進んでいくような構図を取る<sup>10</sup>。

これに対し、カナレットの視点は多くの場合、建物の二階程の高さに浮遊し、情景を見降ろそうとする。奥行き感は強調されるものの、どちらかといえば見晴らしの良いた望を優先するのである。わざわざ手前に強烈な存在感のあるモチーフを置きたがるピラネージとは逆なのである。

こういった態度の違いは、目の前にある制限に対しての振る舞いの差だとも云えるかもしれない。ピラネージが技法や構図等、課せられた条件を噛み破るようにして制作するのに対し、カナレットの方は、入手可能な手法を取り入れつつ、拘りなく作画を進めているように見える。カナレットは三〇代の初め頃には、整った街並みを強調するために、油彩画でも定規を使って線を引きくようになるのだが、これも割り切った工夫の一端であろう。

画面自体から読み取れるこれらの差異の他、作品を展示して気付かされたのは、両者の押しの強さの違いである。

今回の展示では、実際の景観を撮影した写真を、幾つかの作品に添え、実景と虚構との差もお楽しみ頂いたのだが、カナレ

ットの油彩画では、作品の大きさに対してある程度まで写真を小さくしないと、鑑賞の邪魔になるのである。写真に押されて、カナレット作品が引いていく、とても言うおうか。だが、ピラネージの『ローマの景観』連作では、版画としては画面が大きいといえ、B4程度の写真パネルを置いてても、ほとんど邪魔にならないのであった。

感覚的なものであり、証明するのは難しいところであるが、これも両者の性格の違い、ということなのではないだろうか。

- 1 会期は七月二七日(土)〜九月二九日(日)。
- 2 会期は七月一八日(木)〜一〇月六日(日)。
- 3 この組合については、カナレットとヴェネツィアの輝き展カタログ、p.56を参照。
- 4 ピラネージは版画家として知られているが、考古学者であり、建築家でもあった。
- 5 "Campo S. Rocco", in 1742 CANAL, Antonio, (inv./VISENTINI, Antonio, (scul.) *Prospectus Magni Canalis Venetiarum, addito Certamine Nautico et Tabulis Venetis: Omnia sunt Expressa ex Tabulis XIV. Pictis ab Antonio Canale, in Aedibus Josephi Smith Angli, Delinente aique Incidente, Antonio Visentini, Elegantius reusi, Anno MDCCXLII, Venezia, Giovanni Batista Pasquali.*
- 6 "Al Dolo" in After 1744 CANAL, Antonio, *VEDUTE/Altre prese da i luoghi altre ideate/DA/ANTONIO CANAL/e da esso intagliate poste in prospettiva unitate/Al. 1744. Signor GIUSEPPE SMITH/Console di S. M. Britannica appresso la Serenissima Repubblica di Venezia/In segno di stima ed ossequio.*
- 7 "Teatro di Marcello" (part) in *Vedute di Roma*, 1749:50, WE 157.
- 8 銅板の腐食を用いたピラネージの描写については、「二〇二三抽稿」ピラネージの版画技法について、「静岡県立美術館紀要」、第38号、pp.7-15。
- 9 クロス・ハッチングを避けることで、柔らかな銅を使った版を、やや傷みにくくすることが出来る。
- 10 二〇〇四抽稿「景観図・平面図・眺望図」ピラネージの作画態度について、「静岡県立美術館紀要」、第19号、pp.30-36。
- 11 例えば、カナレットとヴェネツィアの輝き展カタログ、p.64、no.55作品解説を参照。
- 12 平均して40×55cm程度。

## 本の窓

鳥海修

『明朝体の教室』

Book&Design 二〇二四年一月



## 明朝体の教室

鳥海修  
日本で最も有名な明朝体デザイナーは、  
あまじやデザインされているの。

日常的にパソコンを使っている人には、身近なフォントになった「游明朝」。従来の「MS明朝」と比べると薄く読みづらいという話をよく聞きますが、印刷すると両者はさほど変わらず、むしろ「游明朝」の方がクセはなく読みやすいような気がします。些細な違いですが、この差異にどんな工夫があるのか。この本は「游明朝」の開発者の一人、鳥海修さんの著書で、書体デザインが丁寧な一から言語化されています。文字のコンセプトによって骨格を微妙に変えたり、文字が歪んで見える人間の錯視を回避するためにまるで線をヤスリで削るかのようには微調整したり、書体デザイナーの神業に驚愕します。一読すると文字を眺めるのが楽しくなるかもしれません。

(主任学芸員 薄田大輔)

## 美術館で働くこと

企画総務課 深澤史織

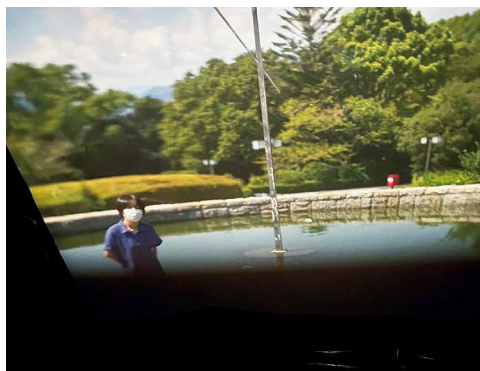
新規採用として美術館に勤務して2年半が経ちました。配属先が決定したときのこととは、今でもよく覚えています。

令和四年春、大学生最後の春休み、ひとり下宿でうとうとしていたとき、その電話はかかってきました。

「県立美術館です。」

新規採用職員には、人事課から直接配属先を告げる電話がかかってきます。告げられた配属先は、県庁でも総合庁舎でもなく県立美術館。予想外の配属先に、眠気もすっかり消えました。美術に全く触れてこなかった私には、県立美術館がどこにあるのかさえ分かりませんでした。

美術館での仕事は、想像していたよりも



カメラオプスクラ越しの私

ずっと多岐にわたるものでした。特に最初の一年は分からないことや覚えられないことばかりで、電話に出ても全く答えられないことも多々ありました。となりでお客様からの質問にすらすら答える先輩職員が、本当にかっこよく輝いて見えたものです。

美術館で働いていて最も驚いたことは、作品のキャプションや小さなパネルを、学芸員さんが手作りで制作していたことです。まさか手作りだったとは。イベントの際にパネルづくりを手伝ったことがあるのですが、きれいにパネルを切るのとはなかなか難しく、展覧会のたびにキャプション制作に励む学芸員さんには尊敬の念を抱かずにはいられません。その後、他の美術館やお寺を見に行った際は「このパネルは手作り？業者に発注している？外注だとしていくらかかっているんだろう？」と、展示品ではなくパネルばかり見てしまうようになりました。

今では、全くの無知だった一年目と比べると、少しは美術や美術館のことが分かるようになってきたと感じています。旅行先を調べるときもいつい美術館を見てしまうようになりました。そんな自分の変化を、私も美術館の職員として馴染んできたのかなど、うれしく思っています。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館)  
工事等による休館：10月8日、12月16日～2025年1月3日  
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
企画総務課／Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課／Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館  
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 2024ロダンウィーク

11月1日(金)⇒11月4日(月・振休)

今年もロダンウィークを開催します。

11月3日(日) 10:00～16:00 ※小雨決行

丘の上のロダンマルシェ

会場：静岡県立美術館 正面広場ほか

主催：草薙マルシェ実行委員会

こだわりのグルメや雑貨のショップが多数出店する充実の一日。お楽しみに！

11月3日(日) 10:00～15:00 ※小雨決行

友の会ひろば

会場：静岡県立美術館 正面玄関前

主催：静岡県立美術館友の会

缶バッジ・こけしの絵付け・似顔絵ステッカーなどのワークショップをお楽しみください。雑貨の販売もあります。

期間中のその他イベント情報は、こちらをご覧ください。



## クラウドファンディング経過報告

9月3日時点でのご寄附の総額が650万円を超え、目標の65パーセントを超える金額まで到達することができました。ご支援いただきました皆様、心から厚くお礼を申し上げます。

清水久兵衛《地簀》の修復を行う見通しが立ち、修復に向けての準備を進めております。トニー・スミス《アマリリス》の修復とプロムナードの整備を実施するためには、もう一步と言うところです。締め切り日の10月30日まで残り1ヶ月を切りましたが、ひきつづきご支援をよろしくお願い申し上げます。※2000円から寄附できます。

## 寄附のアクセスはこちら

※右のコード、又は当館ウェブサイトのトップページのバナーからもアクセスできます。

※郵便局からの入金をご希望の方は、ご連絡いただけたら、郵便局の払込取扱票を郵送いたします。

